

0.《はじめに》

本読書会では安部公房『箱男』を「記述者の座を巡る闘争の記録」として読む。

小説の読書会という特質上、筆者(藤田)の多分に個人的な読みを提示する形になるが、それに対する反論はもちろん大歓迎である。

1.《寓話を巡る問題》

安部公房を語るときに真っ先に出てくるキーワードは「寓話」だろう。「デンドロカカリヤ」から、安部公房は初期の実存主義的傾向から大きく方向転換し寓話的な手法をとるようになる。ここでいう寓話とはつまり比喩的思考に頼った表現/読解の形式である。それまで生硬なかたちで放り出され語られていた死や孤独や故郷の喪失や名前の喪失といったさまざまな観念を、敢えてそのままに具象化すること。例えばS・カルマ氏は名刺にその存在をとってかわられ、実際に胸に空洞を抱えてしまう。そこには意味しかないとも言える。

氏の作品は全て、寓話として読めば読めてしまうもので、その視点からの解釈を唯々と受け入れてしまう様に見える。例えば「脱出とその閉鎖の中に閉じ込められた神無き現代人の不安の意識」とでも(中略)「何処かに逃げようとしてもそのすべを持たない現代日本の都市サラリーマンの不安の意識」(!)とでも、簡単に要約できてしまうかに見えるのである。¹

安部公房の作品は、短編の場合たしかによくできた寓話として読める。しかし、長編となると構成上の「破綻」が見られるものが少なくない。寓話作品としての単純さと裏腹の異様なまでの執拗さ、破綻と呼びたくなる様な逸脱を見せること²、そこにこそ安部作品の魅力があるのではないだろうか。

『砂の女』において、砂は諸価値の空洞化のアレゴリーとしても捉えうるが、肝心なのはその神経症的なまでの「物質としての砂」に関する描写である。『他人の顔』においても顔という意味の塊=名前のようなものが、まるで物質のように扱われている。『箱男』の箱についても、冒頭の《箱の製法》を思い出せば充分であろう。これらの作品においては箱も顔も砂も、寓話に奉仕するだけの記号にはとどまっていない。

意味の世界としてだけ安部作品を、『箱男』を読むことは退屈だ。この読書会では違う読み方を提示したい。

2.《名前を巡る問題》

「私の真理を害ふものは常に名前だった 読人不知」³

リルケ『マルテの手記』の影響を色濃く反映した「名もなき夜のために」以降、安部公房は「名前以前の世界/名前の喪失」とでもいうべきテーマにこだわっている。

「名もなき夜のために」には<マルテのように書く>という自覚がはっきり述べられている。題名の<夜>とはリルケにおける<一切の心象>が一つ一つ<意味の世界>から解き放たれる場所、マルテがあらゆる事物の存在が名もないものに戻されるのを見た、内面の場である。⁴

今自分を取り囲んでいる名前たちでは、世界の奥深さを体現していない、という不満。意味、名前に絡め取られることなく、<もう一度、目の前に在るものを見直してみたらどうだろう>という試

み。このテーマは形を変えながら『壁 S・カルマ氏の犯罪』、『燃えつきた地図』、そして『箱男』にも見られるもので、安部公房にとって重要なものであったと言えよう。

『燃え尽きた地図』において、名前は失われてゆく。しかし、リルケのいうような<夜>はどこにもなく、男はただ真っ白な昼のなかで番地の無い街角に呆然と立ち尽くす。

『燃えつきた地図』ではもはや過去の立体的な実質をものたちに取り戻すことは放棄される。名付けられたまっ平らな猫はそれによって過去の立体を取り戻す訳ではない。(中略)ここにおいて名付けの身振りは如何なる脱出の予兆でもなく、ただまっ平らであることそのものへの祝福へと変質しようとしているのである。(中略)この時点で冒頭のいささか感傷的なエピソード自体が一種の祝福に変わる。「だから君は、道を失っても、迷うことは出来ないのだ。万歳！」⁵

例え名前をつけようともまっ平らでありつづける世界、そしてそのような世界を祝福すること。

箱男は、抽象的で名前をもたない、まったくいらな側の住人であると言える。しかし、彼はそこに留まり続けることはできない。最初、抽象的で石ころのようなものとして登場したはずの箱男だが、中盤以降ノートの筆者は執拗に「ほんものの箱男であること」にこだわり、箱の中の平面を落書きで埋め尽くそうとする。まったくいらなままで、まったくいらであることを祝福するのは、かくも難しい。『燃え尽きた地図』がどこか平面的で茫漠としているのに比べ、『箱男』は多層的で入り組んだ虚構の迷宮を形作っている。

3.《書くことのポリティクス》

『箱男』は記述者の権利を巡って行われる権力闘争の記録であると言える。

『箱男』は、記述という概念に執拗にこだわった作品である。記述するということの困難さ、多くの小説においては前提として受け入れられている語り手＝記述者の絶対性に対する疑念が何度も提示される。

『箱男』を書いているのは誰か？無論、安部公房ではあるのだが、その一つ下のレベルでは、語り手/記述者ということになる。普通この意味においては小説が「書かれた文章」であることはそれほど重要視されない。語り手が語っているということにそれほど注目は集められない。

『箱男』はこの点に意識的だ。『箱男』は「箱男が遺書代わりに書いているノートの内容」とされている。つまり読者が読んでいる文章は箱男が書いている、ということになっている。しかし、中盤以降はこの文章を書いているのは誰なのか、読者は混乱することになる。

(インク切れによる中断。小物入れから古鉛筆を探し出し、芯を削るのに、二分半経過。さいわいぼくはまだ殺されていない。その証拠に、ボールペンから鉛筆に変わりはしたが、字体はそっくり前のままである。)⁶

(ここに十数行の欄外の付記。字体はもちろん、インクの色も、ほとんど本文と見分けがつけられない。)⁷

(紙が違うだけではない。はじめて万年筆が使用され、字体も明らかに違っている。しかし、いずれ誰かが、別のノートにまとめて清書するとすれば、紙も字体も簡単に統一されてしまうはずだ。そう神経質に考えることもないだろう。)⁸

執拗に、というよりはこれみよがしに繰り返されるこれらの表現は、暗に箱男が殺され、別の人間がこのノートを書いた可能性を示唆している。だがもっと重要なのは我々はそれを物理的には確かめる術を持たないということだ。我々が読むのはまさに新潮文庫のページに印刷された活字であり、ノートにびっしりと書き込まれた様々な筆跡ではない。

では具体的に『箱男』に現われている権力闘争の痕跡を読み取ってゆこう。

箱男は医者(というよりは看護婦)に5万円で箱を譲る約束をしてしまう。それは取りも直さず「箱男である権利」を5万円で売却してしまったということに他ならない。箱男という概念において重要なのはその匿名性よりも「一方的に覗く存在であること」だ。これはまさに、何事かについて記し、その実何事かによって記されることはない記者の特権性そのままだ。「箱男である権利 = 記者の権利」であるといえる。

最初は元カメラマンの箱男が万が一殺されたときの遺書代わりとして、ノートは書かれている(と、作品中では書かれている)。だが《鏡の中から》における贗箱男とのやり取りあたりから雲行きが変わってくる。箱男は病院の室内を、鏡を使って覗き込む。するとそこには自分そっくりの贗箱男(医者)と看護婦がなにやら対話している(内容は聞き取れない)。まるで鏡に映したような自分そっくりの姿。しかも自分そっくりの贗箱男は覗き穴から看護婦の裸体を覗いているのだ。覗いている自分の姿を覗いている自分。それまで箱男に保証されてきた「絶対的な覗き屋」の地位がほんの少し揺らぐ。もっとも覗きを覗いている = メタ覗き屋なのだからこっちの方が偉いという言い方も成り立つし、一概に主導権を譲り渡してしまったとまでは行かないだろう。しかし確実に、一本道だった作品世界にはひびが入り、その証拠に次の《別紙による三ページ半の挿入文》は別の筆跡により贗箱男と看護婦の会話が記されている。箱男には聞くことが出来なかったはずの会話だ。

ここで、贗箱男の出現によって初めて箱男の「本物性 / 正当性」が問われることとなったといえる。それまで記者 = 箱男は作品のいわばバックボーンのようなものとして存在していたわけで、その存在を疑われることは無かった。映画におけるカメラのようなもので、鏡に映されない限り観客は当のカメラを意識しない。

そして《書いている僕と 書かれている僕との不機嫌な関係をめぐって》では、箱男と贗箱男が対決する。はじめこのやりとりは箱男の想像する対話いわばシュミレーションとして書かれている。ここでは地の文が、看護婦に向けて箱男の語っている言葉であり、語り手箱男の独壇場といった感がある。

しかし「それにしても、筋違いじゃないのかい？」(p.96)という贗箱男の反撃をきっかけに箱男の台詞も「 」のなかに入るようになる。想像の世界の中で絶対的な一人称で語っていた箱男は、少しだけ登場人物に向かって後退する。もっともまだこの時点では記者 / 語り手は箱男だ。贗箱男は「自分が箱男になり、看護婦と元カメラマンは病院の中で自由に暮らす。自分はそれを好きなように覗く」というプランを提案する。箱男は自らの「箱男である権利」を決定的に譲ることを意味するこの提案になかなか同意しない。

箱から出ようとしないうち箱男に対し、贗箱男は「いつまでこんなシュミレーションの対話を続けるつもりだ、いつまでノートの記述を引き伸ばして箱から出るのを先送りにするつもりだ」と自分がノートに書かれた架空の人物であることを暴露してしまう。書かれた人物というのは普通自分が書かれたものであることを意識しえない。書かれた人物がそこに気づいていない限り、書いている人物は絶対的な優位を保てることになる。

そして贗箱男に対して箱男は、病院も贗箱男も看護婦も箱の中の落書きに過ぎないんだ、と居直る。これは記者の持つ最終的な暴力性であり、奥の手である。

そこで贗箱男はもっと直接的な手段に出ることになる。このノートを今箱男が書いていることが時間的に不可能であることを指摘するのである。記述をひたすら引き伸ばしたが故に、時刻の記述と照らし合わせるとありえない分量の文章が既にノートには書かれてしまっているのだ。つまり箱男がノートの記者であることは不可能だと言い渡し、記者である権利を剥奪しようと言うのだ。さらにはそのノートを書いているのが自分(贗箱男)であって一向に構わないとまで言い放つ。

ここまでヒートアップした対決が、空気銃対ブラックジャックという肉体的暴力の次元では決着しきれないのは致し方ないといえるであろう。ひとまず贗箱男を撃退した箱男は、しかしひとつの疑問に駆られるのだ。本当にこのノートを書いているのは自分なのか？

たしかに僕がまだ生きのびているという証拠は、どこにもないのである。⁹

そして記述者の座は贗箱男に明渡されることになる。医者 = 贗箱男 = 実は贗医者が記述者となる《供述書》の章で初めて《奈奈》《戸山葉子》といった固有名詞が現われるのは示唆的である。

ぼくは狼狽した。いきなり裸の注文が出されたという以上に、彼女が固有名詞で呼ばれたことに、困惑を感じたのかもしれない。いまここに彼女の名前を書くことさえ、ためられるほどだ。彼女が僕にとって、いかにかけがえのない存在であるかを、あらためて痛感させられた。偶然にせよ、やっとめぐり会えたただ一人の異性であり、他に比較の対象が無いのだから、性を区別できる代名詞があるだけでじゅうぶんだったのだ。¹⁰

このように箱男自身は固有名詞を口に出すことを徹底的に避けている。それはつまり箱男が名前以前の世界に憧憬を持っているのだといえるだろう。しかし、そのような箱男の志向は、次章であっさり切り捨てられるわけだ。それは権力闘争に負けたことの帰結である。

医者は実は箱男としてのみならず医者としても贗者であり、彼は軍医から名前を借りている。贗者の医者であることを自ら供述したからには、本物の医者が召還されざるを得ない。

かくして次の章《Cの場合》では本物の医者 = 軍医が語り手となる。この章において贗医者 = 贗箱男は1冊のノートを書いている。その書き出しはまさに『箱男』の冒頭である。ノートの筆者は贗箱男だったのか？ここでは記述者ならびにノートの筆者が入れ替わることによって眩暈にも似た感覚を読者は味わうことになる。つまり『箱男』にミステリ風の一つの筋道だった解答を与えようとした瞬間、読者は誰かひとりの記述者の絶対性、特権性に与しようとしている自分に気づかざるを得ないのだ。矛盾と混乱に満ちたテキストに絶対的解答を与えることが可能であろうか？

さらに贗医者が語り手となる《続・供述書》がはさまれた後、《死刑執行人に罪はない》では再び軍医が語り手となり、理由不明の中断（暗に贗医者による殺害がほのめかされているのだが）によりこの章は終わる。

そこで、考えてみてほしいのだ。いったい誰が、箱男ではなかったのか。誰が、箱男になりそこなったのか。¹¹

箱男とは誰だったのか？本当のノートの記述者は誰だったのか？その問いに一元的な答えを与えることはこのレジユメの目的ではない。むしろ誰もが記述者でありえたこと、その多層性、せめぎあいにこそ注目すること。

誰かが記述者であるということは決して自明なことではない。それはある意味で政治的な営みの帰結なのだ。『箱男』においてはそれが暴露されている。

4.《おわりに》

この読書会の目的はくるくると記述者が入れ替わる『箱男』を記述者を巡る権力闘争の記録として読むこと、さらには「記述」につきまとう危うさのようなものを提示することであったわけだが、それは一度退けたはずの「寓話 / 意味の世界として安部公房を読む」という方法論からどれだけ距離を取れただろうか。

ただひとつ言えるとすれば、寓話的読みは一つの「あらすじ」とでも言うべきものへの絶対的な信頼の上に成り立たざるを得ないが、今回の読み方は「あらすじ」というものを決定しえないという地点で展開されているということだ。記述者が自らの自信を失い更には放逐されているときに、当の記述されたものを無邪気に要約することにはあまり意味が無いと言えるだろう。特権的語り部によって記述された「あらすじ」という名前 / 意味 / 決定された物語は、多層的なテキストの中に散っ

てゆき、真っ白な昼の中で読者は自らの手で新たな名前をつけるのだ。

ここでは誰も迷わない。万歳！¹²

(Endnotes)

¹ 丹生谷貴志 『天皇と倒錯』 所収「安部公房或いは自走する墓石」 p. 170

² 上掲書 p. 170

³ 安部公房 『無名詩集』 エピグラフより。

⁴ 渡部広土 『安部公房』 p.14

⁵ 丹生谷貴志 『死者の挨拶で夜がはじまる』 所収「ここでは誰も迷わない」 p.50

⁶ 安部公房 『箱男』 (新潮文庫版) p.26 傍点は藤田による。以下、特に断りが無い場合は同様。

⁷ 『箱男』 p.42

⁸ 『箱男』 p.75

⁹ 『箱男』 p. 131

¹⁰ 『箱男』 p. 107

¹¹ 『箱男』 p. 174

¹² 丹生谷貴志 『死者の挨拶で夜がはじまる』 所収「ここでは誰も迷わない」 p. 53